

読売

教育ネットワーク

社会はまるごと学校——
すべての大人が先生です



生徒たちが未来の洋上風力発電所の出来栄を競いあう(2016年3月21日 東京都港区の東京海洋大学で／秋元和夫撮影) 2・3面へ

巻頭特集

洋上風力発電所設計コンテスト

神奈川県立光陵高校が3冠 2.3

命を救う人たち 貢献について学ぶ 初芝立命館中高 6・7

「絶望を書く 希望を描く」 立教大学 活字文化公開講座 8・9

埼玉・春日部市立豊野中でまわしよみ新聞 4 日本政策金融公庫で新聞研修 5

NIEセミナーで主権者教育 10 お知らせ・短信 11 リレーエッセー 米プリンストン大学「学生の天国」 12

2016.3

Vol.15



情熱・先端 Mission-E

新日鉄住金エンジニアリングが今年からスタートしたプログラムで「未来の洋上風力発電所を設計せよ!」とのミッションに高校生が挑戦した。プログラムでは、まずワークショップを行い、「浮力」について実験をしたり、講義を受けたりすると同時に本物の風力発電機を見学。昨年11月に東京海洋大学の水理模型実験棟などで中間イベントを行い、各校が試作した風力発電機のアイランド(浮体)の実証テスト、設計図・アイデアの中間報告などを行ったうえで、コンテストに臨んだ。

- 1.実験棟内の巨大な水槽で行われた性能試験
- 2.3.性能試験を振り返る生徒と担当教諭
- 4.プレゼンテーションを行う生徒たち
- 5.審査員からの講評を聞く生徒
- 6.コンテストに参加した生徒たちと審査員ら



神奈川県立光陵高校が3冠

洋上風力発電所設計コンテスト 新日鉄住金エンジニアリングが開催

アイデア続々
最終プレゼンテーション

この日は、最終のプレゼンテーションとともに、実際にポリエチレンフォームやベニヤ板で作ったエネルギーアイランドの模型の性能試験が行われ、発電量、安定性、海洋使用面積、コストなど様々な側面から、審査が行われた。

プレゼンテーションでは、各校とも風や波の力に耐えるよう、どんな工夫をしたかや、コスト削減や環境への配慮にどう取り組んできたかなど、歯切れよく説明。浮体と水面の間に空間を設け、漁船が航行できるようにすることで、漁業との両立を図る案や、エネルギーアイランドを発電所と同時に生簀として活用するものなど、漁業や環境にも配慮した独創的なアイデアが次々と披露された。

その後、大学内の水理模型実験棟に場所を移し、性能試験が実施された。人工的に波を起こす装置を使い、無風で波の無い状態から風が吹きかつ波の荒い状態まで、4段階で模型の性能をチェックした。

無風で波の無い状態では浮かんだものの、風を当てると沈んでしまったり、傾いて何度も沈みそうになりながらも持ちこた

未来の浮体式洋上
風力発電所をつくれ!

中高校生が現役エンジニアの指導を受けながら、洋上風力発電所の設計に挑戦するコンテストの最終審査が3月21日、東京都港区の東京海洋大学で行われ、4校がオリジナルの「浮体式洋上風力発電所(エネルギーアイランド)」の出来栄を競い合った。

コンテストは、「情熱・先端 Mission-E」と題して、国内外で大型プラントの設計・建設などに携わっている新日鉄住金エンジニアリングが主催した。

敬愛学園高校(千葉)、晃華学園中学・高校(東京)、神奈川県立光陵高校(神奈川)、東京成徳中学・高校(東京)の4チームが、2015年8月以降、それぞれ波、風など過酷な環境に耐え、安定的に電力を供給できる未来のエネルギーアイランドの設計に取り組んできた。

11月には、中間報告的なイベントも実施され、各校が成果を持ち寄り、アイデアを共有したり、同社のエンジニアからアドバイスを受けたりしながら、改善点や設計方針を確認。その後も、同社のエンジニアが各学校を訪問して、生徒たちの取り組みをサポートしてきた。

え、発電を続けたりと、結果はまちまち。各校が持ち寄った自信作のパフォーマンスに、生徒や審査員から声援や歓声が上がった。生徒たちからは「貴重な体験ができた。今後に生かしたい」「どの学校もみんなすごかった」といった声が飛び交った。

高校生の発想力に驚き

コンテストの結果は、神奈川県立光陵高校が総合優勝と技術賞、プレゼンテーション賞の3冠に輝き、東京成徳中学・高校に審査員特別賞が授与された。

優勝した光陵高校は、普段は演劇部、剣道部、テニス部、水泳部でそれぞれ活動している1年生有志4人で臨んだ。代表の斎藤耕平君(16)は、「企画を知って、4人メンバーを集めるところから始まったが、まさか総合優勝できるとは思わなかった。浮体をつくるのは難しかった。チームメートには感謝しても感謝しきれない」と声を弾ませた。

コンテストを主催した新日鉄住金エンジニアリングの藤原真一社長は「若い人の発想力は改めてすごいと思った。突拍子もないところからポツと出てくる発想を大事にしていきたい。第2回目にもトライしたい」と話した。

体育館で170人がまわしよみ新聞

埼玉・春日部市立豊野中1年



新聞から関心を持った記事を切り抜いていく。友達がどんな記事を見つけたかにも興味津々。

は「ニュースを感じて、伝える」とことと説明した。

**高まるプレゼン能力
興味ある記事に新たな気付き**

いよいよ作業開始。まず2、3の記事を選んで切り抜く。自分

が何かを感じたニュースなら、小さなベタ記事でもよい。

その後に、3〜5人一組になって、切り抜きを手に、級友に内容を説明し、選んだ理由や感想

をつけ加える。一種のプレゼンテーションで、記事の内容をまとめる力、わかりやすく相手の

関心をかき立てるように話す力が必要になる。高野記者を始

め、先生方もグループの間を回り、発表に耳を傾け、質問やアドバ

イスを投げかけた。

互いの発言を聞いた上で、自分たちの「まわしよみ新聞」で何をトップ記事にするか「編集

会議」で決めていく。記事をうまくレイアウトしながら貼り、

コメントや感想を書き込み、最後には独自の新聞題字を付ける。

当日の朝刊は、米大統領選が1面トップで、女子サッカーの

五輪予選も大きく取り上げられていた。その中で、稲垣那奈さ

ん(13)は公立高校入試の記事を切り抜いた。「受験のことをそろそろ考えなくてはと思った」といい、この身近な題材はグループの賛同を集めてトップ記事になった。題字は「社会新聞」。

稲垣さんは「これまで新聞を読もうと思わなかったけれど、こんないろいろな、自分にも興味のある記事が載っていることがわかった」と話していた。

きっかけはYCでの職場体験

今回の授業が実現したきっかけは、昨年11月に同校1年の男子生徒4人が、新聞販売店「YC春日部東部」で職場体験学習をしたこと。仕事体験のかたわ

ら、「まわしよみ新聞」を作った。大きな模造紙いっぱい記事を貼り、全員が感想やコメントを書き込んだ新聞はなかなかの出来。1年生の担任の飛田哲也教諭(37)は、「4人にはいい経験になった。本校では各教室に新聞が置いてあるが、生徒はなかなか手にとらない。幅広

い記事が載っていることに気づく機会になれば」と期待を込める。4人の新聞はこの日の授業にも見本として持ち込まれた。2日目は発表会。1グループの持ち時間は3分で、全員が発言することをルールに、自分が選んだ記事や題字について1人ずつ話した。全5クラスが混じるように発表を聴くグループを構成したので、聴衆は他のクラスの生徒ばかり。質問や意見が出ると、その場で答えなくてはならない。発表が3分間には収まり切らないグループも出た。小林校長は、「まわしよみ新聞は、問題を見つけ、お互いに意見交換しながら考えを深める点で、まさにアクティブ・ラーニングになっている」と話す。出来上がった新聞は廊下や教室に掲示し、互いに学ぶ機会にするという。



(上)生徒の話を聞く高野記者(中央) (下)出来上がった新聞を手に3分間の発表。全員が発言する。

新聞をグループで回し読みし、記事を切り抜いて作る「まわしよみ新聞」。楽しみながら社会への関心やコミュニケーション力を高められるメディア遊びとして注目されている。埼玉県春日部市立豊野中学校(小林修校長)では3月3日、1年生約170人が「まわしよみ新聞」に挑戦した。

体育館には班ごとに作業台として机が配置され、生徒たちは揃いのジャージ姿で集合した。講師を務めた読売新聞東京本社

の高野光一郎記者は、まず「準備体操」として当日の朝刊をひたすらめくるように指示した。大きな紙面に不慣れで、扱いづらそうにする様子も見られたが、班の中で面白い記事や写真を発見した生徒が声を上げると、周囲ものぞき込み、熱心にくくり始める。

一通り目を通したところで、高野記者が、記事の構成や見出しの役割など、短時間でしっかりと読める方法を生徒たちに伝える。ニュースが紙面に載るまでの過程や雑学などをクイズ形式で紹介し、「まわしよみ新聞」



中村宏之主任研究員(右端)から効果的な広報の仕方などの話を聴く日本政策金融公庫さいたま支店の職員

効果的な情報発信どうすれば？

日本政策金融公庫さいたま支店(さいたま市大宮区)で2月24日、職員を対象にした

広報研修が行われ、読売新聞東京本社調査研究本部の中村宏之主任研究員が講師を務め

た。

受講したのは、北関東や信越地域の支店長らを含む約30人。同公庫は、地域経済の振興をめざして個人や企業に融資を行っている。中小企業のほか個人起業家やNPO法人なども対象とし、福祉や子育て、まちづくり、環境保護などのソーシャルビジネスを積極的に支援している。起業家らの活動が報道されれば事業の後押しにもなることから、情報をいかにメディアに周知するかに腐心してきた。

中村主任研究員は、地方支局を経て経済部に長く所属し、昨年、共著で「御社の寿命」(中公新書ラクレ)を上梓するなど企業経営に詳しい。この日は取材経験をもとに、ニュースの価値判断や効果的な情報発信について約2時間話した。広報で重要なのは、「わかりやすさ、ニュース性の高さ、時代の流れを反映していること」と、実際の新聞記事やプレス・リリースを取り上げながら指摘した。

新聞記者のキャリアパスや取材の仕方にも話は及んだ。「新聞は正確さが一番大切」と、1つの交通事故の記事を例に、警察やバス会社、住民、目撃者など様々な側面から取材していると説明。広報に際しても、問い合わせ先を明確にしたり、文書配布だけでなくレクチャーを付けたり、積極的な情報開示や意見交換の姿勢の必要性を強調した。

質疑応答では、広報に適した時期や時間帯、どのような資料を準備しておくか、などと活発に質問が出た。

研修を企画した宗友輝夫・北関東地区統轄(57)は、「新聞記者を招いた研修は初めて。広報の際の着眼点や、見出しのように1行で要点を表現する方法などをすぐにでも取り入れたい」と話す。レクチャーの仕方を質問した宇都宮支店の板坂守雄さん(43)は「記者の話を聞けるのは貴重な機会。記事にするまでの過程が参考になった」、さいたま支店の中川亮さん(36)は、「創業の経緯など、ストーリー性がニュースになると気づいた。今後は積極的に発信したい」と振り返っていた。

読売新聞の企業向け研修をご利用ください

読売新聞は、新聞の媒体力や新聞記者の経験・ノウハウを活用した企業向け研修を受け付けています。新聞を使った講義やワークを通じて、社員や学生一人ひとりの「書く力」「読む力」「会話する力」を高め、変化の激しい時代に向き合っている企業や学生たちをサポートします。

研修例

●講義・ワーク

- 新聞記事に学ぶ「わかりやすい文章の書き方」
- 新聞の読み方講座 ○まわし読み新聞

●ワークシート&論文添削(月1~3回、6ヶ月間)

講義・ワークに添削課題を組み合わせることで、効果が更に高まります。期間中、受講者には、教材として読売新聞をご購読いただきます。講師料はいただきません。

お申し込み、お問い合わせは教育ネットワーク事務局(☎03・3217・1966)へ



国境なき医師団の活動に初めて参加した寺田医師(写真左、ハイチの外傷病院で)＝MSF提供

外科医としてハイチへ

国境なき医師団 (MSF)

なぜ海外の医療援助活動に参加するのか――なぜ紛争地に行くのか――。連続授業第二弾では、教室から多くの「なぜ」が出た。講師は大阪市立大学付属病院救命救急センター・寺田貴史医師(34)。こうした「なぜ」に「命を助けるのに理由はいりません」と答えると、生徒たちはただただ息をのむしかなかった。

寺田医師は2015年10月から6週間、MSFのメンバーとして中米・カリブ海の島国ハイチに派遣された外科医だ。

スクリーンを使いながら、MSFが行う医療人道援助を説明。2014年は60か国・地域の紛争地や自然災害被災地などに7000人を派遣。活動資金は1000億円で、48時間以内に調査チームを最前線に投入できる機動力があるという。国際NPOのダイ

ナミックな姿を紹介した。

業の後半は、寺田医師のハイチでの日々にはスポーツトライトを当てた。活動拠点は首都ポルトープランス近郊の外傷専門病院。医療環境や治安など日本では考えられないようなことを理解・認識する必要があるとしたうえで、国政選挙の最中には政局が不安定で、首や胸を銃で撃たれた患者の手術に追われたことなどを語った。

6週間の体験を振り返り、海外では現地の状況と向き合いながら、葛藤や課題を乗り越える柔軟な力が必要だと伝えた寺田医師。最後に、「今、世界で何が起きているのか、そして自分や日本のスタンスはどうなのか。しっかりと把握して行動することが大切です」と話して締めくくった。

PART2 Feb.03

授業では、iPS細胞について「生命倫理的問題があるES細胞の弱点が克服できた」と説明。さらに「iPS細胞は移植治療だけでなく、薬の研究開発にも応用できます」と、「創薬」の応用に

様々な臓器や組織の細胞に変化するiPS細胞(人工多能性幹細胞)が誕生してから今年で10年。連続授業第3弾は、iPS細胞で創薬研究を進める大日本住友製薬から松下恵三薬学博士(42)を招いた。

松下さんは2013年に理化学研究所に派遣され、ヒトES細胞(胚性幹細胞)から立体的な網膜を作る技術を習得。この技術をiPS細胞に応用し、神戸にある同社の再生医療の拠点で目の難病「網膜色素変性」治療を目指す研究に携わってきた。

様



iPS細胞から作った網膜細胞を見せる松下さん(右から2人目・写真は同校提供)

生

生徒たちの好奇心を刺激したのは、最先端のiPS細胞技術の紹介だ。人工的に作った心臓組織シートが実際に収縮する動画が映され

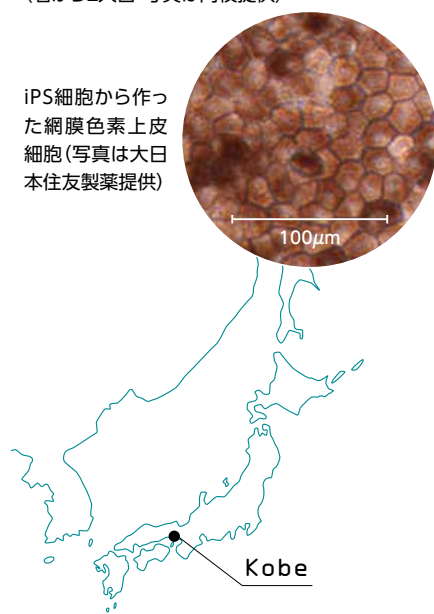
3回の授業を受けて

自らの命を顧みず、多くの時間を費やして、苦しむ人々を助けた。将来、自転車関係の仕事に就きたいが、自転車を通じて「どのように社会に貢献できるのか」を考えるようになった。

電動自転車の性能を改良すれば子育て中の母親の負担は減り、行動範囲はもっと広がるはず。高齢者が安全に乗れる自転車だって開発できると思う。生活のためにお金を稼ぐことは大切だが、「何をしたら人の役に立つのか」という考えも大切にしていきたい。(高校1年・衛藤知良さん)

医療人道援助と再生医療への挑戦。一人ひとりの講師の言葉の一つ一つに、経験に裏打ちされた重みが感じられ、生徒たちが貢献の意味を考えるヒントになった。(川本秀樹教諭)

PART3 Feb.17



iPS細胞で創薬

大日本住友製薬



防護服姿(上)で講義を始め、様々な視点から援助を語った鈴木医師(写真は初芝立命館中高提供)

エボラ熱の感染拡大をロールプレーで体験する生徒たち(写真は同校提供)

身防護服で登場し、大教室の220人の生徒たちを一気に引きつけた。ゴーグル、マスク、手袋を脱いで話しはじめたのは長崎大学熱帯医学研究所の鈴木基医師(44)。2014年、エボラ熱が猛威を振るった西アフリカのリベリアにMSFの一員として派遣された感染症疫学の研究者だ。

生徒たちに、西アフリカ3か国で1万人以上が犠牲となった経緯や、国境をひんばんに行き来する地域の社会・文化的な特徴が流行の背景にあることを説明。医療活動にスボットライトが当たりがちだが、現地では感染者と家族に対する偏見や差別の解消も大切な任務だと話した。

「なぜ欧米は大規模な支援を展開したのか」という視点から、生徒たちは人道援助と国益についても学んだ。西アフリカ諸国と旧宗主国だった欧米には大きな人的・物的交流があることに触れ、現地でエボラを封じ込めることが自国への感染拡大阻止につながると解説した。

鈴木医師が生徒に投げかけた問いは、「日本人が医療支援のためアフリカに行く必要があるのか」だ。人道的見地

業終了後、1人の生徒が鈴木医師を訪ねた。貧困に苦しむ子供向けの募金集めに携わるうち、自らの手で助けたいと考えるようになった養松加奈子さんだ。「海外医療援助に看護師は参加できますか?」と質問。鈴木医師は、「患者をケアする看護師は医師よりも重要だ」と話し、「経験を積んでください。英語の勉強も必要です」とアドバイスした。養松さんは看護師という進路を真剣に考え始めている。

PART1 Jan.20

命を救う人たち

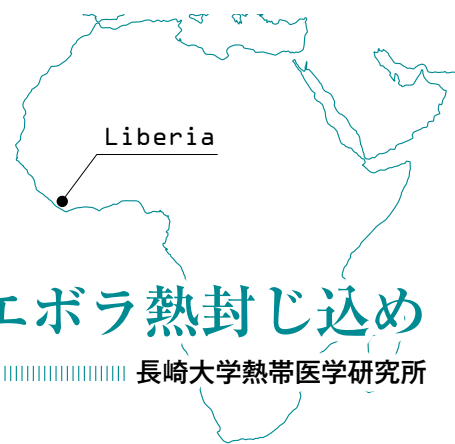
貢献について学ぶ

初芝立命館中高で連続出前授業

初芝立命館高校(大阪府堺市)は1月から2月にかけて、高校1年生の総合学習の一環として、世界を舞台に活躍する講師を招いた連続授業「貢献って何?」を行った。計3回の授業には長崎大学熱帯医学研究所、国境なき医師団(MSF)、大日本住友製薬(本社・大阪/東京)がそれぞれ講師を派遣。医師や研究者が語った貢献と生徒たちの声を同校・川本秀樹教諭がレポートする。



から支援は当然必要だが、ウイリスを日本に持ち帰る恐れも出てくる――。生徒たちは、人を救うことに伴うリスクについても考えさせられた。



長崎大学熱帯医学研究所

絶望を書く 希望を描く

立教大学 活字文化公開講座

読売新聞社が21世紀活字文化プロジェクトの一環として行っている「活字文化公開講座」が1月21日、東京都豊島区の立教大学池袋キャンパスで開かれた。「絶望を書く、希望を描く」をテーマに、芥川賞作家で同大准教授の小野正嗣さんと直木賞作家の西加奈子さんが、異文化体験、海外文学が創作活動に与えた影響について語り合った。（コーディネーターは石田汗太・読売新聞東京本社専門委員）

主催：立教大学、活字文化推進会議／主管：読売新聞社／後援：文部科学省

加藤睦・立教大学副総長
あいさつ



活字文化公開講座を立教大学で開催するのは2回目です。前回は3年前、ピースの又吉直樹さんをお招きしました。今回は、又吉さんが芥川賞を受賞される前の回で、直木賞、芥川賞をそれぞれ受賞した西加奈子さん、私どもの同僚でもある小野正嗣さんをお迎えし、活字文化という堅苦しいテーマはいったん忘れて、面白い話、興味深い話をお楽しみいただければと思います。

異文化体験

石田 2人には、海外文学の豊富な読書体験、海外で生まれ育ったり、留学したりという異文化体験の共通点があります。まず、小野さんがずっと小説の舞台で書いている「浦」と、留学先のフランスで長く滞在したオルレアンとの関わりを教えてください。

小野 「浦」は故郷の大分県佐伯市にある海辺の小さな集落です。本を読む人を周りで見たことがない。けれども、とんちのきいたことをいうおじさん、おばさんがいて、話し言葉が豊かな文化があります。そういう人たちから大きな影響を受けたように思います。大学進学で上京し、その後、フランスのパリ第8大学に留学しました。そこで文学部の教授で、オルレアンに暮らす詩人のクロード・ムシャールさんと出会いました。クロードは世界中の文学に興味がある人で、誘われてオルレアンで5年近く暮らし、朝から晩まで文学の話をする生活を送りました。世界の様々な土地の文学を発見し、生まれ育った大分県の集落から離れることで、故郷がどういう場所で、どんな魅力があるのかに気が付きました。

西 私の場合は、父の仕事の都合でカイロへ行きました。小説を書くなんてその時は思いもしなかったし、子供だから、いい経験になるなんて思っていないでした。帰国して、日焼けしている人も色白の人もいるけれども、全然違うということはないことに気がきました。エジプトでは明らかに皮膚の色が違うし、においも言葉も違う。日本では見たことがない裸足で歩いている子や物乞いしている子もいる。仲良く遊ぶ子たちですら、いつ買ったものか分からない大人の靴を履いている子もあり、衝撃を受けました。恵まれた環境は私の手柄じゃないのに、どうして彼らと私は違うんだらう。人生で一番かもと思うほど楽しい4年間ではあったのですが、同時にそれを突きつけ

られた4年間でした。作家になってから、エジプトのことを書いたらどうですかと言ってくださる方もいたんだけど、書く時期というのがあって、それが「サラバ！」のときに訪れたなと思います。

モリスン *Toni Morrison*

小野 西さんはなぜトニ・モリスンの「青い眼がほしい」を読もうと思ったんですか。僕は高校2年生の時に、こんなの読んでないです。

西 友達と待ち合わせしていた時間があつたので、本屋をぶらぶらしていたら、海外文学のコーナーでモリスンのシリーズが並べてありました。表紙がきれいで手に取ったのがきっかけです。最初の「秘密にしていたけ



おの・まさつぐ
小野正嗣
作家、立教大学文学部准教授。1970年、大分県生まれ。東京大学卒業後、パリ第8大学で博士号取得。2002年、「にぎやかな湾に背負われた船」で三島由紀夫賞。15年、「九年前の祈り」で芥川賞受賞。



石田専門委員

の影響を受けています。「サラバ！」は「さくら」があつたから書けたところもあります。主人公のお兄さん「君が自殺するんです。ずっと一君のことを考えていて、あんな殺し方をしないで良かったんじゃないかと思っていましたね。そのときは全力で書いたし恥じることはないけれど、もっと違うやり方があつた気がして。「サラバ！」では主人公が何か大いなる事故に遭う、神の天啓か何かがあつて変わるということは絶対にしないで、おこうと決めて書きまし

ありますが、「九年前の祈り」とも響き合っていると感じます。**小野** インディアイの作品に出会ったのは、毎日通ったオルレアンの書店です。店主の女性から「この作家が好きだと思っから」と渡されたのが、「ロジー・カルプ」でした。かなり救いのない話なのですが、魅了されました。インディアイの作品を読んできましたが、基本的にどれもハッピーじゃない。独特の文体で書かれている。自分の書くものの中に、この作品に引かれる理由が答えとして表現されているのではないかと感じます。

西 翻訳の話をしている、作家の柴崎友香さんが本当にドメスティックな自分の個人的な思い入れを書けば書くほど、向こうの人は分かるって言うてくれるとおっしゃっていました。

小野 書くことは自分の中を掘っていくことだと、西さんがよくおっしゃっています。あくまでパーソナルなことを掘っていくんだけど、それが普遍的な人間の経験や記憶といったものにつながっていくのが、小説を書くこと、そして読むことの不思議なところですね。



に・い・かなこ
西 加奈子
作家。1977年、イラン・テヘラン生まれ、エジプト・カイロ、大阪育ち。関西大学卒業。2004年、「あおい」でデビュー。08年、「通天閣」で織田作之助賞。15年、「サラバ」で直木賞受賞。

石田 文学は人を現実にも救えると思いますか。
西 物理的にシリアの難民を救

小野 僕も救いになると思っています。一番大きな理由は、自分自身が文学作品を読むことで救われたと実感しているから。ただ、別に読まない人がいてもいいと思う。その存在に触れているだけで、支えられ励まされている気持ちになれる人が周りにいれば、本を読まなくてもいいのかもしれない。でも、そんな人にはそうしょっちゅう出会えるもんじゃない。出会える確率としては本の方が高い。小説のように、他者の言葉、あるいは違う言語で書かれたものが、ふと自分のものの見方や感じ方を変えてくれることが本当に起こると思います。

**18歳の
1票**

NIEセミナーで主権者教育 模擬投票の実践報告など



「まわしよみ新聞」づくりに取り組む参加者と
鹿野川・読売新聞NIE企画デザイナー(中央)



梶山正司
初等中等教育局主任視学官

第24回読売NIEセミナーが2月27日、読売新聞東京本社で開かれた。選挙権年齢が18歳以上に引き下げられ、学校現場での主権者教育の重要性が高まっていることから、新聞を活用した主権者教育をテーマにした。教員を中心に高校生や大学生も含め全国から約90人が参加した。

冒頭、文部科学省の梶山正司・初等中等教育局主任視学官が「主権者教育と新聞などの資料の活用」と題して講演。梶山氏は「身近な例で政治や投票の仕組みを考えさせる場合、(新聞などの)各種資料を活用して指導することが非常に有効だ」と述べた。続く実践報告では、小中高

校の3教諭が、新聞を活用した主権者教育の実践例を紹介。新聞活用実習では、鹿野川喜代美・読売新聞NIE企画デザイナーが、グループで関心のある記事を選んで壁新聞を作る「まわしよみ新聞」を指導した。

「まわしよみ新聞」のテーマは「新聞から政策課題を考える」。指導役の鹿野川・NIE企画デザイナーは「子供たちはまわしよみ新聞を通して、社会の問題を自分のこととして考え、個人としての意見を発言できるようにする。主権者教育そのものだ」と意義を強調した。

参加者は、4〜5人の班に分かれ、読売、朝日、毎日、日経、産経、東京の各朝刊とジャパン・ニュースの計7紙をめくり、人口減や米大統領選、マナーに関する投書など政策課題になりそうな記事を選び、自分たちなりの「二面」を完成させた。

授業例紹介

●記事をスクラップ、要約、そして発表

千葉市立鶴沢小 丸吉美紀 教諭

小学校でできる主権者教育とは、社会の出来事に関心を持ち、自分なりの考えを持てるようにすることだと思う。

5年生を対象に、興味を持った記事をスクラップしてその内容を要約し、自分の考えを書く活動を続けさせたと、読み書きが不得意な児童が、半年後には記事内容に踏み込んだ感想を書けるようになった。

意見文を書く国語の授業では、18歳選挙権やマイナンバーに興味を示した。意見文を読んだ保護者は「子供がこんなふう考えていたんだ」と驚く。子供も自分なりの意見を持っていることを親にも知ってもらい、家庭で話題にする機会が増えれば、児童の社会への関心や考えも深まるはずだ。



●社会、政治の参加、97%が支持

さいたま市立植竹中 小谷野弘子 教諭

2学年の国語で「新聞スピーチ」を行っている。毎回、生徒2人が興味のある記事を各1分のスピーチに要約して発表、その後約7分の質疑応答を行う。

「マイナス金利って何?」といった直球の質問も珍しくないで、各自記事を読み込み、想定質問と答えを準備してくる。成人年齢引き下げ議論の記事に注目した生徒は、満20歳から成人とする民法を支持、「選挙権年齢に合わせて成人年齢まで下げるのは反対」とまとめた。

校内のアンケート調査では、社会や政治問題に「参加すべきだ」「参加したほうがいい」とした2年生は計97%に上った。社会の様々な問題を身近なこととして捉える力を育むことこそ主権者教育だと思う。



●選挙報道活用して模擬投票

千葉県立流山おおたかの森高 大塚功祐 教諭

生徒の家の半数が新聞を定期購読していない。まず日常的に新聞に触れさせることが課題なので、廊下に新聞を貼り出している。授業では、こちらが指定した記事を10分間で読ませ、意見を書かせている。

前回の衆院選の際、全校で模擬投票を行ったら、投票率は67%に達した。NIEを続けてきたことも関係していると思う。

模擬投票の事前学習は、政治経済を選択している3年生を対象に行った。各政党の第一声が載った記事は、それぞれの主張が端的に表れていて役に立った。党名と党首名を隠し、「ほかの記事を参考に、誰の発言が当てなさい」とクイズ形式で出題したら、生徒は熱心に取り組んでいた。



ジャパン・ニュースの電子書籍 「オリンピック英語」発売

読売新聞の日刊英字紙ジャパン・ニュースで連載中の「Olympic Word Book」を再編集した電子書籍「オリンピック英語」第1巻が発売されました。

初回は、今夏のリオデジャネイロ五輪で、1924年のパリ大会以来92年ぶりに正式競技として復活する「ラグビー編」です。トライを決める(score a try)や、決まり事(routine)、7人制ラグビー(rugby sevens)など15の用語・表現を紹介しています。「オリンピック英語」を使えば、五輪観戦やスポーツを通じた英語学習の楽しみも倍増すること間違いなしです。

ウェブサイト(www.amazon.co.jp/dp/B01CJW31QQ)から購入できます。この連載は、読売新聞の英語学習面「えいご工房」の「Welcome 東京五輪」で、日本語の解説付きで読むこともできます。

この「えいご工房」と、ジャパン・ニュースの語学学習面JN LearningLabは、4月から金曜掲載が日曜掲載に変わります。週明けにいいスタートを切るために、日曜のひとときを英語学習にあててみませんか？



平成28年度日本語検定実施について

平成28年度日本語検定を実施します。読売新聞教育ネットワーク事務局でも受検申し込みを受け付けています。

■第1回(通算19回)検定日

○一般会場……6月18日(土) ○準会場……6月17日(金)、18日(土)

■申込期間 3月1日(火)～5月20日(金)

■インターネットでの申し込み(読売新聞専用申し込み受付画面から)

<https://www.nihongokentei.jp/houjin/moshikomie.php?ccd=4350>

■受検料の支払い……クレジットカード、ペイジー、コンビニ決済

■郵送での申し込み

郵送で申し込む方は、下記の電話番号へお問い合わせください。資料をお送りいたします。資料に同封された願書に必要事項を記入し、受検料の支払いを済ませた上で出願していただく流れとなります。

読売専用ダイヤル:03-5390-7498 (土日祝日を除く9:30～17:00)

《読売新聞から申し込んだ方への特典》

インターネットでも、郵送でも、読売新聞専用申し込み用紙を使えば、受検前に過去問題1回分の検定問題と解答・解説冊子がもらえます。

フォーラム 「考え、議論する道德」 参加者と授業実践を募集

読売新聞社は、道德の特別教科化をテーマにした第1回フォーラム「考え、議論する道德」を7月27日(水)、東京・大手町のよみうり大手町ホールで開きます。ロバート・キャンベル東京大学教授、合田哲雄・文科省教育課程課長が講演します。

フォーラム参加者と、「考え、議論する道德」の会場で、実践をもとにした分科会や模擬授業を行います。

フォーラムの分科会で、「特別の教科 道德」の模擬授業や学習指導案の検討会を開催します。分科会で活用するための、小・中学校の道德授業の学習指導案を募集します。日頃の実践や新しい授業づくりの構想をお寄せ下さい。

【応募資格】 教員・教育関係者

(グループや学校など団体での応募も歓迎します)

【締め切り】 2016年5月9日(月) 必着

【応募方法】 応募者の氏名・所属及び職名(団体応募の場合は団体名)、住所、電話番号、電子メールアドレスを明記した紙と、学習指導案と参考資料を送ってください。実際に授業を実施した場合は、実践記録も作成してください。送付先と詳細は以下の通りです。

■形式・分量

1. 指導案……A4判2ページ(A3判見開き1ページ)。実践記録を付ける場合は、A4判2ページ以内。形式は自由です。下記の事項を含めて構成して下さい。

- ①対象学年(学校種を明記) ②主題名 ③ねらい ④教材名
- ⑤主題設定の理由(「考え、議論する道德」を実現する工夫を含む) ⑥学習指導過程 ⑦評価の観点

2. 参考資料……使用教材の内容がわかる説明や資料を別紙A4判1枚で添付。

3. 実践記録(授業を実践した場合)……実際の授業の流れを踏まえ、①子どもの発言や話し合いの様子の分析、②板書や子どもの感想などの記録、③授業者による考察・今後の課題など、実践の様子がわかるように書いて下さい。

■応募先

電子メール……meforumu16@nier.go.jp

郵送の場合……〒100-8055(住所不要)

読売新聞教育ネットワーク事務局「道德フォーラム」係

■問い合わせ

読売新聞「道德フォーラム」事務局(03・6712・5021)。

■審査について

フォーラムで活用する学習指導案は、本フォーラム審査会で審査のうえ決定します。



海外で学ぶ・リレーエッセー ⑮ 米プリンストン大学「学生の天国」

渋谷教育学園幕張高校卒、米プリンストン大学1年

山
谷
峻
さん



山谷峻さん(右から2人目)(本人提供)

アメリカに暮らす多くの学生にとって、食堂は友達と一緒に温かい食事を囲んで時間を過ごす所だろう。僕にとって食堂は働く所でもある。
食堂で働く利点を幾つかあげると、上司が見ていない隙に食べ物を食べられること、寮の大きなほどある冷蔵庫を体験できること、スペシャルメニューを友達より一週間先にわかること



プリンストン大学

米ニュージャージー州プリンストンにある。1746年創立でアイビー・リーグ8校の一つ。米国では4番目に古いカレッジ。学生数は5200人、大学院生は2600人で、OBにはウッドロー・ウィルソン大統領、ノーベル物理学賞のリチャード・ファインマンなど。

がある。友達が食べ物を残すたびに威嚇してしまう癖がついたことを除いては、これまで食堂で働いてきた経験は概ね良いものであった。

食堂運営のお手伝いを通して、ただ単に食べるにきている生徒が気づかないようなことにも目がいく。例えば従業員が夜ご飯の仕込みを昼ご飯の時間からしていること、たまに英語よりスペイン語の会話が聞こえてくること、鉄板のそばで立つて生徒の注文を受けることは想像以上に暑くて、ベトベトしていて、大変だということ。

新入生のオリエンテーションのときに、ひとりの教授が次のようなことを言った。それは学部教育の4年間、勉学が生徒の最大の関心であるべきだということ。僕たちは料理、洗濯、住む家のことについて心配をする必要はない。

こうして勉強に集中できる環境が整備されている。学習の習熟度を示す学習曲線は急峻な右肩上がりだ。選択した講座の一つでは、最初の講義でプログラム言語を駆け足で終えてしまった。別の講座では毎週200ページも読まされる。長時間、勉強し、教科書に首っ引きになり、パソコンのマックブックのスクリーンに釘付けになる。

僕はたまにどれほど自分が恵まれているかを忘れてしまう。日々、タイプを打ち、友と語り、教室に駆け込む。プリンストン大学のスクールカラーにあやかっ、よく僕は「オレンジ色のバブル」に住んでいるという。「バブル」の中は学生の天国だ。特権を自覚せずに日常生活に埋没することも簡単だ。ソーダ水の補充作業、食堂のテーブル拭きは時間給で12ドル。食堂で働くことを通して僕は、大学が何事もないかのように運営されていることが幻想だということを知った。

こうした仕組みを維持し、学生を守るために「バブル」の下ではだれかが運営に力を注いでいる。4年間それを意識し、感謝して勉強に励みたい。

(会報編集部抄訳「The Japan News 2015年10月9日」)

海外留学を目指す高校生に進学支援を行っているNPO法人「留学フェロシップ」のメンバーが、海外のキャンパスライフをリレー連載します。留学フェロシップの詳細はウェブサイトへ。
<http://ryu-fellow.org>

英語の原文は<http://the-japan-news.com/news/article/0002458087>で読みいただけます。